

東南アジア史学会会報

1990年11月

第53号

目 次

1990年度春季会員総会摘録	(1)
第13期第1回委員会摘録	(2)
1989年度会計決算報告	(2)

第43回研究大会報告

プログラム	(3)
-------	-----

個人研究発表要旨

ダウラトとプルジャニアン	西尾 寛治 (5)
フランス植民地期以前のコーチシナ開発について	大野美紀子 (5)
タイの労働運動	浅見 靖仁 (6)
ムアン統治権力の性格について	加藤久美子 (7)
南スラウェシの諸言語	山口真佐夫 (8)

共通論題 「東南アジア史のなかのマラッカ海峡」報告要旨

東南アジアにおけるマレー世界	生田 滋 (8)
港市としてのマラッカ	石井 米雄 (9)
東南アジア史におけるマラッカ	大木 昌 (10)
マレー世界におけるマラッカ王国の意味	加藤 剛 (10)
沿岸港市国家の展開	鈴木 恒之 (11)

海外学術情報	石井 米雄 (12)
--------	------------

資料・研究短報

「南方関与」開教関係資料について	榎木 瑞生 (13)
ホイアン・シンポジウムとベトナム史研究の“トイモイ”	桃木 至朗 (16)

地区例会・研究会活動状況	(18)
新入会員・住所変更等	(19)

東南アジア史学会会報

1990年11月

第53号

目 次

1990年度春季会員総会摘録	(1)
第13期第1回委員会摘録	(2)
1989年度会計決算報告	(2)

第43回研究大会報告

プログラム	(3)
-------	-----

個人研究発表要旨

ダウラトとプルジャニアン	西尾 寛治 (5)
フランス植民地期以前のコーチシナ開発について	大野美紀子 (5)
タイの労働運動	浅見 靖仁 (6)
ムアン統治権力の性格について	加藤久美子 (7)
南スラウェシの諸言語	山口真佐夫 (8)

共通論題 「東南アジア史のなかのマラッカ海峡」報告要旨

東南アジアにおけるマレー世界	生田 滋 (8)
港市としてのマラッカ	石井 米雄 (9)
東南アジア史におけるマラッカ	大木 昌 (10)
マレー世界におけるマラッカ王国の意味	加藤 剛 (10)
沿岸港市国家の展開	鈴木 恒之 (11)

海外学術情報	石井 米雄 (12)
--------	------------

資料・研究短報

「南方関与」開教関係資料について	榎木 瑞生 (13)
ホイアン・シンポジウムとベトナム史研究の“トイモイ”	桃木 至朗 (16)

地区例会・研究会活動状況	(18)
新入会員・住所変更等	(19)

1990年度春季会員総会摘録

1990年度春季会員総会が、1990年6月4日植村泰夫会員を議長として浜松大学で開催され、次の議事をはかった。

《報告事項》

1. 明石会長より挨拶があり、第13期委員の紹介と今期の運営方針として、①東南アジア史学研究の意義を一般社会に広める、②新会員の積極的獲得、③会誌の充実、④海外との学術交流の活発化、という抱負が述べられた。
2. 庶務委員より、会員数は1990年6月3日現在331名であること、会報52号を発行したこと、会報の「資料・研究短報」欄を拡大し、会報を充実してゆく方針であること、が報告された。
3. 前期会計委員より1989年度決算に関する報告（2頁参照）があり、会計監査委員の承認を受けたことが説明された。総会は同報告を承認した。
4. 編集委員より、組版代の上昇により、これまで同様の形式と内容で『東南アジア—歴史と文化』を発行することが困難な環境のなかにあって、会誌の質を向上させるべく今期の編集方針について、次のような説明があった。
 - (a)これまで応募原稿でやってきたが、論文についてはこれから積極的に依頼していく。ただし、依頼原稿についても査読制度は適用する。
 - (b)投稿規定を、第19号に掲載した『東南アジア—歴史と文化』執筆要領の如く改めるとともに、投稿申し込み者・投稿被依頼者には新たに作成した細則を予め送付する。
 - (c)「研究最前線」という企画を新たに設け、一年に1～2本の割合で各分野での最新の研究動向や問題点の紹介と論評を掲載する。
 - (d)これまでの「書評・紹介」は、長文の「書評論文」と短い「新刊紹介」に分離する。
 - (e)「書評・紹介、モンスーン・学界消息」は、1段組に改め、後々までに有益な情報と見做されるものにかぎり掲載したいので、それ以外は会報に投稿していただきたい。第20号ではモンスーン・学界消息が殆ど掲載されず、学会発足25周年に因み、過去の会長経験者に、学会の歩みと将来の展望を執筆していただく。
 - (f)文献目録採録基準を絞り込み、この欄の膨張を抑えたいので、採録基準については、編集委員会にご一任願いたい。
5. 渉外・学術情報委員より、IAHAの日程、アメリカ・カナダ及びANUの東南アジア研究動向について説明があった（詳細は12頁参照）。
6. 大会委員より、今回の研究大会（第43回）は討論を活発にし、問題の発展にふくらみをもたせる目的で、パネルディスカッションという新しい方式を採用した旨、報告があった。また自由研究発表部門には計8名の会員の応募があったが、時間の関係上3名の方には御遠慮頂き、これまで発表経験のない若い研究者を優先したことがあわせて、報告された。

《審議事項》

1. 1990年秋季研究大会（第44回）について

日時は1990年12月1日(土)2日(日)の両日とし、東京都杉並区善福寺2-6-1、東京女子大学善福寺キャンパスで開催すること。形式については従来通り初日を自由研究発表、二日目をシンポジウムとし、後者のテーマは、会社・企業経営史からみた植民地期東南アジア社会・経済史の問題を扱うこと。以上の案が庶務委員より諮られ、承認された。

第13期第1回委員会摘録

1990年6月2日と3日の両日、摂南大学で会長が議長となり、上記総会案件に加え創立25周年記念事業について審議し、以下の点で意見の一致をみた。

1991年秋季大会を、創立25周年記念大会とし、1991年11月29日の夜集合し、11月30日の朝から開始して、12月1日の夕刻に閉会する。開催地は名古屋周辺とし、全員が合宿形式で行う。自由研究発表と、共通テーマによる討論会を設定する。討論会ではごくおおまかに、世界の東南アジア史研究の現状と展望に関する問題を扱う。これらの具体的方策については、創立25周年記念大会実行委員会を組織し、これに付託する。実行委員会は、大会委員に中部地区委員、それに庶務委員を加えたものとする。もし大会が成功し共通テーマについて活字にして残した方がよいということになれば、これも創立25周年記念事業の一環として行う。

1989年度会計決算報告

会計決算報告

第12期会計委員 根本 敬

(1989年1月1日～1989年12月31日)

I. 収入の部

円

会員会費	1,634,500
貯金利子	19,326
バックナンバー売上	113,230
業績目録（旧）売上	21,000
同（新）売上	27,600
会員名簿（新）売上	2,000
前年度繰越金	2,032,643

計 3,850,299

《審議事項》

1. 1990年秋季研究大会（第44回）について

日時は1990年12月1日(土)2日(日)の両日とし、東京都杉並区善福寺2-6-1、東京女子大学善福寺キャンパスで開催すること。形式については従来通り初日を自由研究発表、二日目をシンポジウムとし、後者のテーマは、会社・企業経営史からみた植民地期東南アジア社会・経済史の問題を扱うこと。以上の案が庶務委員より諮られ、承認された。

第13期第1回委員会摘録

1990年6月2日と3日の両日、摂南大学で会長が議長となり、上記総会案件に加え創立25周年記念事業について審議し、以下の点で意見の一致をみた。

1991年秋季大会を、創立25周年記念大会とし、1991年11月29日の夜集合し、11月30日の朝から開始して、12月1日の夕刻に閉会する。開催地は名古屋周辺とし、全員が合宿形式で行う。自由研究発表と、共通テーマによる討論会を設定する。討論会ではごくおおまかに、世界の東南アジア史研究の現状と展望に関する問題を扱う。これらの具体的方策については、創立25周年記念大会実行委員会を組織し、これに付託する。実行委員会は、大会委員に中部地区委員、それに庶務委員を加えたものとする。もし大会が成功し共通テーマについて活字にして残した方がよいということになれば、これも創立25周年記念事業の一環として行う。

1989年度会計決算報告

会計決算報告

第12期会計委員 根本 敬

(1989年1月1日～1989年12月31日)

I. 収入の部

円

会員会費	1,634,500
貯金利子	19,326
バックナンバー売上	113,230
業績目録（旧）売上	21,000
同（新）売上	27,600
会員名簿（新）売上	2,000
前年度繰越金	2,032,643

計 3,850,299

Ⅱ. 支出の部	円
第41回大会予報	13,380
会報No.50第41回大会プログラム等	
印刷費及び発送費	180,575
第41回大会費	214,640
第42回大会予報費	12,710
会報No.51第42回大会プログラム等	
印刷費及び発送費	139,367
第42回大会費	146,614
『東南アジア歴史と文化』18号誌代	927,360
『会員名簿』作成費および発送費	348,114
会長選挙事務費	43,388
会費徴収費	3,000
通信費	31,704
事務費	31,438
計	2,092,290
Ⅲ. 差引残高（次年度繰越金）	1,758,009
	3,850,299

本決算報告を、会計簿貸借表及び第一勧業銀行普通預金通帳、郵便貯金通帳、1989年12月29日付郵便振替受払通知票のそれぞれに記載の残高と照合し、かつ領収証等を点検した結果、報告の内容に誤りのないことを確認した。

1989年12月31日 会計監査 千原大五郎

第43回研究大会報告

東南アジア史学会第43回研究大会は1990年6月2日と3日の両日、摂南大学寝屋川キャンパスで開催された。大会2日目のパネルディスカッションで、ディスカサントとして高谷好一氏（東南アジア研究センター）が予定されていたが、同氏が都合により出席できなくなつたため急遽石井米雄氏にお願いした。

プログラムは以下の通りである。

6月2日(土) 於：11号館3階

12:30 受付開始

13:10 開会の辞

倉沢愛子大会準備委員長（摂南大学）

自由研究発表

13:40 ダウラト VS プルジャンジアン

—マレー世界の伝統的政治体系に関する一考察—

西尾 寛治（東京大学大学院）

14:20 フランス植民地期以前のコーチシナ開発について

大野美紀子（立命館大学研修生）

15:00 タイの労働運動—その社会的経済的背景と政治的役割の変化—

浅見 靖仁（東京大学大学院）

15:40 ムアン統治権力の性格について

—タイ・ルー族のムアンフェンファンにおける事例研究より—

加藤久美子（名古屋大学大学院）

16:20 南スラウエシの諸言語

山口真佐夫（摂南大学）

17:00 講演 *Problems of Writing Islamic Intellectual History of Southeast Asia*

Dr. Taufik Abdullah

(Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia-Kyoto University)

18:00 懇親会

6月3日(日) 於：11号館11階

共通論題「東南アジア史のなかのマラッカ海峡」

9:00 受付開始

9:30 趣旨説明 土屋 健治（京都大学東南アジア研究センター）

9:40 パネルディスカッション

司会 桜木由躬雄（東京大学）

ディスカサント

生田 滋（大東文化大学）

石井 米雄（上智大学アジア文化研究所）

大木 昌（八千代国際大学）

加藤 剛（京都大学東南アジア研究センター）

鈴木 恒之（東京女子大学）

12:20 昼食（委員会）

13:30 会員総会

14:30 総合討論

16:30 閉会の辞

個人研究発表要旨

ダウラトとプルジャンジアン

—マレー世界の伝統的政治体系に関する一考察— 西尾 寛治

本発表の目的は、前植民地期マレー世界の主要な国家として、同地域の文化の形成に多大な影響を及ぼしたジョホール王国（＝マラッカ王国の後継）の政治体系の解明であり、マレー世界の前植民地期国家の政治体系解明に向けての試みの一つとして位置づけられる。

既に先行研究が指摘するように、ジョホール王国の王と高官は相互依存関係にあった。すなわち、王は、「ダウラト」（daulat；王の神聖性）を保有し、国家の統合を保障するシンボル的存在であり、一方、高官は最高の行政権力者であった。

この王国の盛衰の内的要因は、いつに、王と高官の君臣間のハーモニーの有無に関わっていた。君臣間のハーモニーとは、王と高官の上記のような役割分担に基づく相互依存関係の維持であり、この時国家は繁栄・存続した。国家の衰退・崩壊は、君臣間のディスハーモニーによってもたらされたが、それは王の徳目違反 [=臣下虐待] ないしは高官のダウラト拒否によって発生した。この点は、17世紀末から18世紀初めにかけて発生した3つの事件 [ブンダハラ派貴族のクーデタ事件 (1688), スルタン・マフムード殺害事件 (1699) とラジャ・クチルのジョホール征服事件 (1718)] の考察によって明らかとなる。

ジョホール王国の政治体系には、ダウラトとプルジャンジアン（perjanjian；君臣相互の宣誓により締結される君臣間の協定）という2つの原理が存在したが、この2つの原理は次のように理解できる。すなわち、(1)ジョホール王国の支配形態は、宮廷集団支配の場合と人民支配の場合で異なっており、前者はプルジャンジアン、後者はダウラトによる。(2)ダウラトは観念的、プルジャンジアンはダウラト [=王の不可侵性] の具体的表現。(3)プルジャンジアンの矛盾する項目は、君臣間の相互依存関係の重要性を意味し、これが君臣間のハーモニー維持のための制度であることを示す。(4)プルジャンジアンはマレー的王権思想のイスラム的表現である。

フランス植民地期以前のコーチシナ開発について——大野美紀子

ベトナム南部コーチシナ開発の早期段階について検討すると、18世紀後半までに、コーチシナ開発が一定の進展をみていたと推定される。広南阮氏期には、コーチシナ東部からベトナム中部—フエ周辺へと米が流通しており、その売買に北客—中国人が関与していた。その米がある程度までフエ周辺の構造的な米不足を解消する機能を果たしていた状況があった。ベト人のコーチシナ進出を当時の広南阮氏下の行政単位を指標としてその変遷より跡づけると、開発の早期段階はメコンデルタ内ではなく、東部の中部高原に接縁する段丘地に始まり、18世紀初めにはサイゴン以西の平原部へと開発が進展していくプロセスが窺われる。開発の早期段階における組織形態については、当時の史

個人研究発表要旨

ダウラトとプルジャンジアン

—マレー世界の伝統的政治体系に関する一考察— 西尾 寛治

本発表の目的は、前植民地期マレー世界の主要な国家として、同地域の文化の形成に多大な影響を及ぼしたジョホール王国（＝マラッカ王国の後継）の政治体系の解明であり、マレー世界の前植民地期国家の政治体系解明に向けての試みの一つとして位置づけられる。

既に先行研究が指摘するように、ジョホール王国の王と高官は相互依存関係にあった。すなわち、王は、「ダウラト」（daulat；王の神聖性）を保有し、国家の統合を保障するシンボル的存在であり、一方、高官は最高の行政権力者であった。

この王国の盛衰の内的要因は、いつに、王と高官の君臣間のハーモニーの有無に関わっていた。君臣間のハーモニーとは、王と高官の上記のような役割分担に基づく相互依存関係の維持であり、この時国家は繁栄・存続した。国家の衰退・崩壊は、君臣間のディスハーモニーによってもたらされたが、それは王の徳目違反 [=臣下虐待] ないしは高官のダウラト拒否によって発生した。この点は、17世紀末から18世紀初めにかけて発生した3つの事件 [ブンダハラ派貴族のクーデタ事件 (1688), スルタン・マフムード殺害事件 (1699) とラジャ・クチルのジョホール征服事件 (1718)] の考察によって明らかとなる。

ジョホール王国の政治体系には、ダウラトとプルジャンジアン（perjanjian；君臣相互の宣誓により締結される君臣間の協定）という2つの原理が存在したが、この2つの原理は次のように理解できる。すなわち、(1)ジョホール王国の支配形態は、宮廷集団支配の場合と人民支配の場合で異なっており、前者はプルジャンジアン、後者はダウラトによる。(2)ダウラトは観念的、プルジャンジアンはダウラト [=王の不可侵性] の具体的表現。(3)プルジャンジアンの矛盾する項目は、君臣間の相互依存関係の重要性を意味し、これが君臣間のハーモニー維持のための制度であることを示す。(4)プルジャンジアンはマレー的王権思想のイスラム的表現である。

フランス植民地期以前のコーチシナ開発について——大野美紀子

ベトナム南部コーチシナ開発の早期段階について検討すると、18世紀後半までに、コーチシナ開発が一定の進展をみていたと推定される。広南阮氏期には、コーチシナ東部からベトナム中部—フエ周辺へと米が流通しており、その売買に北客—中国人が関与していた。その米がある程度までフエ周辺の構造的な米不足を解消する機能を果たしていた状況があった。ベト人のコーチシナ進出を当時の広南阮氏下の行政単位を指標としてその変遷より跡づけると、開発の早期段階はメコンデルタ内ではなく、東部の中部高原に接縁する段丘地に始まり、18世紀初めにはサイゴン以西の平原部へと開発が進展していくプロセスが窺われる。開発の早期段階における組織形態については、当時の史

料より、開発者は、中部・北部の流民ばかりでなく中部の経済力有る富民もまた対象となっていた。そして、入植者は必ずしも非組織的に流入・開墾していただけではなく、当時の広南王阮氏によって意図的に広南国のある中部から民が招募されていた。広南王阮氏は、入植を促すために、入植者に対する3年間の免税措置といった入植当初の生活の不安定さを補う施策を採用する一方、新たに開発された地を村落単位に編成、徵稅台帳を作成し、その管理下へと置いていった。このように、早期の開発が一定の國家権力の存在と不可分に結びついていた理由として、コーチシナ東部の開発が異民族先住地へのベト人の進出であったこと、また、広南王阮氏のコーチシナ経略が、チャム・クメール・シアムに対する疆域確定策としての意味合いを持っていたことがあげられる。また、中部より生じた流民が非組織的にもしくは招募という組織的形態によってコーチシナへと吸収されていること、中部への米の供給地であったことから、早期の開発の特色として、この時期のコーチシナ開発は中部の社会的状況と密接に結びついていた。しかし、開発が先行した地域である段丘地・平原部においての農業開発に関わる側面での水利事業といった国家の関与が働いていたという記録は遺されていない。「山田」「草田」「澤田」といった史料にあげられる農作形態や当時栽培された稻品種の性質から考えると、当時の稻作は農作業の行程全体を雨季に合わせた天水依存型であった。すなわち、開発形態を「工学的適応」と「農学的適応」に分類するならば、農学的適応による開発が優先したと考えられる。したがって、開発の組織面において国家は関与したが、経済的基盤になる農業開発の側面においては、既存の稻品種の選択と雨季の利水条件に対応した稻作という、すぐれて「農学的適応」型開発であった。このような早期開発のあり方が19世紀前半において南部コーチシナ社会の阮朝による支配を困難にした状況が生じてきたといえるのではないか。すなわち、開発がなんらかの権力の主導による工学的適応をともなっておらず、国家権力へと資源・人員の求心力を維持する基盤がなかったためではないかと考えられる。

タイの労働運動

—その社会経済的背景と政治的役割の変化— 浅見靖仁

タイの現代政治史研究の中で、労働運動はこれまで最も研究の進んでいない分野の1つであった。これは、主にタイの政治をエリート・グループ（特に軍部、官僚、王室）の動きから説明するという伝統が欧米の学者にもタイ人の学者にも根強く残っていたこと、資料上の制約によるものだといえよう。しかし、1970年代以降そうした古いパラダイムではタイの政治は有効に説明できないことが次第に認識されるようになり、最近徐々にではあるが労働運動についての研究も行なわれるようになってきている。そこで今回の発表では、タイ人若手研究者による労働運動研究の新しい成果を踏まえた上で、発表者自身が収集した資料も利用して、タイの労働運動史をその草創期から再検討することによってタイ現代政治史研究に新しい視点を提供することをその目的とした。

これまでタイの労働運動史は断続的なものと考えられることが多かった。1932年以前

料より、開発者は、中部・北部の流民ばかりでなく中部の経済力有る富民もまた対象となっていた。そして、入植者は必ずしも非組織的に流入・開墾していただけではなく、当時の広南王阮氏によって意図的に広南国のある中部から民が招募されていた。広南王阮氏は、入植を促すために、入植者に対する3年間の免税措置といった入植当初の生活の不安定さを補う施策を採用する一方、新たに開発された地を村落単位に編成、徵稅台帳を作成し、その管理下へと置いていった。このように、早期の開発が一定の国家権力の存在と不可分に結びついていた理由として、コーチシナ東部の開発が異民族先住地へのベト人の進出であったこと、また、広南王阮氏のコーチシナ経略が、チャム・クメール・シアムに対する疆域確定策としての意味合いを持っていたことがあげられる。また、中部より生じた流民が非組織的にもしくは招募という組織的形態によってコーチシナへと吸収されていること、中部への米の供給地であったことから、早期の開発の特色として、この時期のコーチシナ開発は中部の社会的状況と密接に結びついていた。しかし、開発が先行した地域である段丘地・平原部においての農業開発に関わる側面での水利事業といった国家の関与が働いていたという記録は遺されていない。「山田」「草田」「澤田」といった史料にあげられる農作形態や当時栽培された稻品種の性質から考えると、当時の稻作は農作業の行程全体を雨季に合わせた天水依存型であった。すなわち、開発形態を「工学的適応」と「農学的適応」に分類するならば、農学的適応による開発が優先したと考えられる。したがって、開発の組織面において国家は関与したが、経済的基盤になる農業開発の側面においては、既存の稻品種の選択と雨季の利水条件に対応した稻作という、すぐれて「農学的適応」型開発であった。このような早期開発のあり方が19世紀前半において南部コーチシナ社会の阮朝による支配を困難にした状況が生じてきたといえるのではないか。すなわち、開発がなんらかの権力の主導による工学的適応をともなっておらず、国家権力へと資源・人員の求心力を維持する基盤がなかったためではないかと考えられる。

タイの労働運動

—その社会経済的背景と政治的役割の変化— 浅見靖仁

タイの現代政治史研究の中で、労働運動はこれまで最も研究の進んでいない分野の1つであった。これは、主にタイの政治をエリート・グループ（特に軍部、官僚、王室）の動きから説明するという伝統が欧米の学者にもタイ人の学者にも根強く残っていたこと、資料上の制約によるものだといえよう。しかし、1970年代以降そうした古いパラダイムではタイの政治は有効に説明できないことが次第に認識されるようになり、最近徐々にではあるが労働運動についての研究も行なわれるようになってきている。そこで今回の発表では、タイ人若手研究者による労働運動研究の新しい成果を踏まえた上で、発表者自身が収集した資料も利用して、タイの労働運動史をその草創期から再検討することによってタイ現代政治史研究に新しい視点を提供することをその目的とした。

これまでタイの労働運動史は断続的なものと考えられることが多かった。1932年以前

と以後、1940年代と1950年代、サリットのクーデター前と後には労働運動の継続性はほとんどないと考えられることが多かったのである。そしてまた労働運動はこれまで労働者自身の運動ではなく外部の者が労働者を煽動して政治的に利用しようとして生じたものとして理解されることが多かった。このためプリーディー派が力を失えばサハーアチワ系の労働運動は消滅し、ピブンが失脚すればタイ労働協会系の労働運動も消滅したものと考えられてきたのである。しかし、実際にタイの労働運動を詳細に調べてみると、その草創期から現在にいたるまでかなりの継続性があることが明らかになる。外部の者の強い影響下におかれてきたことは事実であるが、それにもかかわらず社会経済構造の変化にともなって徐々にではあるが着実に力をつけってきたのである。1973年以降の急速な労働運動の盛り上がりも一朝一夕に生じたものではなく、1958年以前の労働運動の基盤があったからこそ可能になったということができよう。



ムアン統治権力の性格について

—タイ・ルー族のムアンツェンフンにおける事例研究より— ———加藤久美子

大陸東南アジア北部一帯では、ひとつひとつの山間盆地を基礎単位として、タイ族の政治的枠組み「ムアン」が数多く成立していた。これらムアンにおける統治権力とは、どのような性格を持ったものであろうか。先行研究の中には、ムアンを、チャオムアン（ムアンの主）により専制的に支配・統合された統一的世界であったとする見方もある。

発表者はタイ・ルー族のムアン、ムアンツェンフンを取り上げ、1950年代に土地改革のために行われた調査の報告書を主な情報源として分析を行なった。本発表では、それに基づき、ムアンにおける統治権力について、上記の見解とは異なる視点を提示する。その手掛かりとなるのは、先住自由農民（タイムアン）の存在とその実態である。

統治権力によって移住させられた統治貴族に従属する農民の状況と比較すれば、先住農民は統治貴族との結び付きが弱く、統治権力による収奪も重くはなかった。先住農民はひとつひとつの扇状地空間を単位として自治を行っていた。その中で扇頂に立地する先住農民村落は、扇状地を潤す大用水路取水口を掌握しうる村落であり、扇状地上の他の村落に様々な面で優越している。特に非タイ族や貴族従属農民村落との間には、支配従属関係とも言うべき関係を確立していた。しかし統治権力は、先住農民がそのような権力を行使することには一切干渉しなかった。以上のことから、先住農民と彼らが生活している扇状地部に対しては、統治権力は緩やかな統制をしていたにすぎないと言えよう。

統治権力が直接的に支配しうるのは貴族従属農民であり、より強い影響力を及ぼしうる領域は先住農民のいない非扇状地部、即ち盆地低部であった。統治貴族は、盆地から河川が流れ出す付近にその権力の基盤となる「都市」（ツェン）を形成し、盆地低部に広がる沖積平野に多くの耕地を持っていった。この沖積平野の領域は都市人口を支えるために重要な役割を果たしていたと考えられ、統治権力によってその排水・開墾が行なわれた可能性もある。統治権力から称号を与えられた水利官の多くは盆地低部の貴族従属



と以後、1940年代と1950年代、サリットのクーデター前と後には労働運動の継続性はほとんどないと考えられることが多かったのである。そしてまた労働運動はこれまで労働者自身の運動ではなく外部の者が労働者を煽動して政治的に利用しようとして生じたものとして理解されることが多かった。このためプリーディー派が力を失えばサハーアチワ系の労働運動は消滅し、ピブンが失脚すればタイ労働協会系の労働運動も消滅したものと考えられてきたのである。しかし、実際にタイの労働運動を詳細に調べてみると、その草創期から現在にいたるまでかなりの継続性があることが明らかになる。外部の者の強い影響下におかれてきたことは事実であるが、それにもかかわらず社会経済構造の変化にともなって徐々にではあるが着実に力をつけってきたのである。1973年以降の急速な労働運動の盛り上がりも一朝一夕に生じたものではなく、1958年以前の労働運動の基盤があったからこそ可能になったということができよう。



ムアン統治権力の性格について

—タイ・ルー族のムアンツェンフンにおける事例研究より— ———加藤久美子

大陸東南アジア北部一帯では、ひとつひとつの山間盆地を基礎単位として、タイ族の政治的枠組み「ムアン」が数多く成立していた。これらムアンにおける統治権力とは、どのような性格を持ったものであろうか。先行研究の中には、ムアンを、チャオムアン（ムアンの主）により専制的に支配・統合された統一的世界であったとする見方もある。

発表者はタイ・ルー族のムアン、ムアンツェンフンを取り上げ、1950年代に土地改革のために行われた調査の報告書を主な情報源として分析を行なった。本発表では、それに基づき、ムアンにおける統治権力について、上記の見解とは異なる視点を提示する。その手掛かりとなるのは、先住自由農民（タイムアン）の存在とその実態である。

統治権力によって移住させられた統治貴族に従属する農民の状況と比較すれば、先住農民は統治貴族との結び付きが弱く、統治権力による収奪も重くはなかった。先住農民はひとつひとつの扇状地空間を単位として自治を行っていた。その中で扇頂に立地する先住農民村落は、扇状地を潤す大用水路取水口を掌握しうる村落であり、扇状地上の他の村落に様々な面で優越している。特に非タイ族や貴族従属農民村落との間には、支配従属関係とも言うべき関係を確立していた。しかし統治権力は、先住農民がそのような権力を行使することには一切干渉しなかった。以上のことから、先住農民と彼らが生活している扇状地部に対しては、統治権力は緩やかな統制をしていたにすぎないと言えよう。

統治権力が直接的に支配しうるのは貴族従属農民であり、より強い影響力を及ぼしうる領域は先住農民のいない非扇状地部、即ち盆地低部であった。統治貴族は、盆地から河川が流れ出す付近にその権力の基盤となる「都市」（ツェン）を形成し、盆地低部に広がる沖積平野に多くの耕地を持っていった。この沖積平野の領域は都市人口を支えるために重要な役割を果たしていたと考えられ、統治権力によってその排水・開墾が行なわれた可能性もある。統治権力から称号を与えられた水利官の多くは盆地低部の貴族従属



農民村落のものであり、彼らによって用水路排水口が管理されていたというのも、統治権力が盆地低部の沖積平野を重視していた表れであろう。

この事例は、「都市」に基盤を置くムアン統治権力が、自給的農村に住む先住農民にまで強い統制を及ぼすことができなかったことを示している。その意味で、ムアンは、専制的支配によって統一された世界とは言えないものである。

南スラウェシの諸言語

山口 真佐夫

南スラウェシには南島語族インドネシア語派南スラウェシグループの言語が分布している。研究者により言語の数え方が違うが、7～18という数が出ている。

南スラウェシの最南部にはマカサル語、その北にブギス語が分布している。この二言語が南スラウェシの言語中ボネ湾からマカサル海峡まで分布している言語である。ブギス語の北側はマカサル海峡に沿ってマンダル語、マムジュ語が分布し、内陸にはマッセンレンブル諸語、サダン語、ママサ語、ピトゥウルンナサル語、セコ語などが分布している。

南島祖語に対する各言語の具現をみると、*k-（語頭の軟口蓋閉鎖音）、*ə（中舌、非円唇）、*j（硬口蓋音、半母音）が指標となる。一般にそれぞれブギス語はə̄, ə, j̄, マカサル語はk-, a, j, マンダル語はə̄, o, j, マムジュ語はk-, e, j̄, マッセンレンブル諸語はk-, o, jで現れる。

しかし各言語において上記の法則に合わない例が出る。また南スラウェシのいくつかの言語から再構形をたてることができるものがある。中には中部スラウェシの言語とつながる可能性をみせるものもあるが、語彙的に中部スラウェシとは距離がある。

南スラウェシの諸言語にみられるこれらの現象は例えばピンラン地域にみられるように借用等に帰すことができる場合もあるが、ブギス語、マカサル語に見られる東西差のように基層語の存在を考えることにより解決できる問題もある。またマムジュ語、マンダル語、マッセンレンブル諸語に見られる例外はそれぞれ隣接する言語間の接触の結果が考えられる。

共通論題 「東南アジア史のなかのマラッカ海峡」

東南アジアにおけるマレー世界

生田 滋

東南アジアにおけるマレー世界を考える時、まず東南アジア地域をアユタヤを中心として東西南北の四区域にわけて考えると理解しやすい。この際、南北の線はまっすぐではなく、途中で東に折れ、マラッカを通る線として考えてみたい。

まずアユタヤを通る東西の線であるが、私はこの線がマレー民族の活動のほぼ北限であると考えている。ほぼこの線上に位置するアユタヤ、ダナンなどはいわばマレー民族と大陸部に居住する諸民族との交会地としての機能を持っている。またアユタヤ・マラッカを通る南北の線を考えてみると、マレー民族の本来の活動の舞台はその東側にあり、

農民村落のものであり、彼らによって用水路排水口が管理されていたというのも、統治権力が盆地低部の沖積平野を重視していた表れであろう。

この事例は、「都市」に基盤を置くムアン統治権力が、自給的農村に住む先住農民にまで強い統制を及ぼすことができなかったことを示している。その意味で、ムアンは、専制的支配によって統一された世界とは言えないものである。

南スラウェシの諸言語

山口 真佐夫

南スラウェシには南島語族インドネシア語派南スラウェシグループの言語が分布している。研究者により言語の数え方が違うが、7～18という数が出ている。

南スラウェシの最南部にはマカサル語、その北にブギス語が分布している。この二言語が南スラウェシの言語中ボネ湾からマカサル海峡まで分布している言語である。ブギス語の北側はマカサル海峡に沿ってマンダル語、マムジュ語が分布し、内陸にはマッセンレンブル諸語、サダン語、ママサ語、ピトゥウルンナサル語、セコ語などが分布している。

南島祖語に対する各言語の具現をみると、*k-（語頭の軟口蓋閉鎖音）、*θ（中舌、非円唇）、*j（硬口蓋音、半母音）が指標となる。一般にそれぞれブギス語はθ-、θ、j、マカサル語はk-、a、j、マンダル語はθ-、θ、j、マムジュ語はk-、e、j、マッセンレンブル諸語はk-、θ、jで現れる。

しかし各言語において上記の法則に合わない例が出る。また南スラウェシのいくつかの言語から再構形をたてることができるものがある。中には中部スラウェシの言語とつながる可能性をみせるものもあるが、語彙的に中部スラウェシとは距離がある。

南スラウェシの諸言語にみられるこれらの現象は例えばピンラン地域にみられるように借用等に帰すことができる場合もあるが、ブギス語、マカサル語に見られる東西差のように基層語の存在を考えることにより解決できる問題もある。またマムジュ語、マンダル語、マッセンレンブル諸語に見られる例外はそれぞれ隣接する言語間の接触の結果が考えられる。

共通論題 「東南アジア史のなかのマラッカ海峡」

東南アジアにおけるマレー世界

生田 滋

東南アジアにおけるマレー世界を考える時、まず東南アジア地域をアユタヤを中心として東西南北の四区域にわけて考えると理解しやすい。この際、南北の線はまっすぐではなく、途中で東に折れ、マラッカを通る線として考えてみたい。

まずアユタヤを通る東西の線であるが、私はこの線がマレー民族の活動のほぼ北限であると考えている。ほぼこの線上に位置するアユタヤ、ダナンなどはいわばマレー民族と大陸部に居住する諸民族との交会地としての機能を持っている。またアユタヤ・マラッカを通る南北の線を考えてみると、マレー民族の本来の活動の舞台はその東側にあり、

農民村落のものであり、彼らによって用水路排水口が管理されていたというのも、統治権力が盆地低部の沖積平野を重視していた表れであろう。

この事例は、「都市」に基盤を置くムアン統治権力が、自給的農村に住む先住農民にまで強い統制を及ぼすことができなかったことを示している。その意味で、ムアンは、専制的支配によって統一された世界とは言えないものである。

南スラウェシの諸言語

山口 真佐夫

南スラウェシには南島語族インドネシア語派南スラウェシグループの言語が分布している。研究者により言語の数え方が違うが、7～18という数が出ている。

南スラウェシの最南部にはマカサル語、その北にブギス語が分布している。この二言語が南スラウェシの言語中ボネ湾からマカサル海峡まで分布している言語である。ブギス語の北側はマカサル海峡に沿ってマンダル語、マムジュ語が分布し、内陸にはマッセンレンブル諸語、サダン語、ママサ語、ピトゥウルンナサル語、セコ語などが分布している。

南島祖語に対する各言語の具現をみると、*k-（語頭の軟口蓋閉鎖音）、*ə（中舌、非円唇）、*j（硬口蓋音、半母音）が指標となる。一般にそれぞれブギス語はə̄, ə, j̄、マカサル語はk-, a, j, マンダル語はə̄, o, j, マムジュ語はk-, e, j̄、マッセンレンブル諸語はk-, o, jで現れる。

しかし各言語において上記の法則に合わない例が出る。また南スラウェシのいくつかの言語から再構形をたてることができるものがある。中には中部スラウェシの言語とつながる可能性をみせるものもあるが、語彙的に中部スラウェシとは距離がある。

南スラウェシの諸言語にみられるこれらの現象は例えばピンラン地域にみられるように借用等に帰すことができる場合もあるが、ブギス語、マカサル語に見られる東西差のように基層語の存在を考えることにより解決できる問題もある。またマムジュ語、マンダル語、マッセンレンブル諸語に見られる例外はそれぞれ隣接する言語間の接触の結果が考えられる。

共通論題 「東南アジア史のなかのマラッカ海峡」

東南アジアにおけるマレー世界

生田 滋

東南アジアにおけるマレー世界を考える時、まず東南アジア地域をアユタヤを中心として東西南北の四区域にわけて考えると理解しやすい。この際、南北の線はまっすぐではなく、途中で東に折れ、マラッカを通る線として考えてみたい。

まずアユタヤを通る東西の線であるが、私はこの線がマレー民族の活動のほぼ北限であると考えている。ほぼこの線上に位置するアユタヤ、ダナンなどはいわばマレー民族と大陸部に居住する諸民族との交会地としての機能を持っている。またアユタヤ・マラッカを通る南北の線を考えてみると、マレー民族の本来の活動の舞台はその東側にあり、

そこから次第にその西側の地域に進出したと考えることができる。

もちろんこうした考え方があまりにも物事を単純化しているということもできよう。しかしこのように考えることによって、複雑な東南アジアの歴史をある程度整理して考えることが可能になるのではなかろうか。

たとえばこのように考えることによってすくなくとも十七世紀後半以前のアユタヤにおいてマレー民族の存在がきわめて重要であった事実を説明できるようにおもわれる。またマラッカ王国の成立はこの境界線に住むマレー民族の西側への進出の一つの過程であると考えることもできるし、また同王国は本来は民族的、文化的にかなり性格の異なる二つの地域を同時に支配していたと考えることもできる。

ここで一つ興味ある事実が明らかになる。それはビルマを除く地域ではモン・クメール系民族の活動の範囲もほぼこのアユタヤを通る東西の線の南側に含まれることである。モン・クメール系諸民族がタイ系諸民族の圧迫を受けてきたことはすでに指摘されているが、あるいはかれらを本当の意味で圧迫していたのはマレー族など、東南アジア群島部からの移住者だったのではなかろうか。最初に述べた東南アジア地域をアユタヤを中心にして東西南北の四地域にわけてその歴史をかんがえることによってそうした新しい問題が提起できるようと思われる。

港市としてのマラッカ———— 石井米雄

前近代の輸送手段のなかで船はその格段の積載能力によって陸路輸送を凌駕していた。

一隻の大型帆船は優に1000頭のラクダのキャラバンを超える運送能力を備えていた。東西交易路の中間に存在するマラッカ海峡は海路の発展とともにその重要性を増した。マラッカ海峡は西方からの東行船、東インドネシアからの西行船、中国からの南行船の接点であり、風向の影響からその沿岸に交易港が発展する条件を備えていた。交易港には、

(1)予見可能な交易を保証する諸条件（関税の規則性、紛争解決手段の整備など）

(2)船舶航行の安全を保証するためのパトロール機能、

(3)積荷売り捌きのための市場

(4)帰路の積荷とする魅力的商品集荷の便宜

(5)風待ち期間中の倉庫設備

などが備わっていることを必要とした。

マラッカ海峡は、西方からもたらされる物産（綿布など）と、東インド産の香辛料と、中国の物産（絹布、陶磁器など）がそれぞれ会い交わって交換されるための条件を備えていた。古くは頓遜が「東西の交通相会し日に万余の人が集まって珍物、宝貨でないものはない」と記され、のちにマラッカが同様の理由で西洋人に賞賛されたのもこうした事情による。ポルトガルのマラッカ占領とマラッカ海峡交易の独占は、ビルマ南部の諸港と北スマトラとの結び付きをつよめ、あるいはマレー半島横断路を媒介とする貿易中継地としてのアユタヤの重要性を高めるなどの結果を生みだしたが、これもまたマラッカ海峡のもつ生態学的諸条件を基底とする適応の一形態ととらえることができよう。東

そこから次第にその西側の地域に進出したと考えることができる。

もちろんこうした考え方があまりにも物事を単純化しているということもできよう。しかしこのように考えることによって、複雑な東南アジアの歴史をある程度整理して考えることが可能になるのではなかろうか。

たとえばこのように考えることによってすくなくとも十七世紀後半以前のアユタヤにおいてマレー民族の存在がきわめて重要であった事実を説明できるようにおもわれる。またマラッカ王国の成立はこの境界線に住むマレー民族の西側への進出の一つの過程であると考えることもできるし、また同王国は本来は民族的、文化的にかなり性格の異なる二つの地域を同時に支配していたと考えることもできる。

ここで一つ興味ある事実が明らかになる。それはビルマを除く地域ではモン・クメール系民族の活動の範囲もほぼこのアユタヤを通る東西の線の南側に含まれることである。モン・クメール系諸民族がタイ系諸民族の圧迫を受けてきたことはすでに指摘されているが、あるいはかれらを本当の意味で圧迫していたのはマレー族など、東南アジア群島部からの移住者だったのではなかろうか。最初に述べた東南アジア地域をアユタヤを中心にして東西南北の四地域にわけてその歴史をかんがえることによってそうした新しい問題が提起できるようと思われる。

港市としてのマラッカ———— 石井米雄

前近代の輸送手段のなかで船はその格段の積載能力によって陸路輸送を凌駕していた。

一隻の大型帆船は優に1000頭のラクダのキャラバンを超える運送能力を備えていた。東西交易路の中間に存在するマラッカ海峡は海路の発展とともにその重要性を増した。マラッカ海峡は西方からの東行船、東インドネシアからの西行船、中国からの南行船の接点であり、風向の影響からその沿岸に交易港が発展する条件を備えていた。交易港には、

(1)予見可能な交易を保証する諸条件（関税の規則性、紛争解決手段の整備など）

(2)船舶航行の安全を保証するためのパトロール機能、

(3)積荷売り捌きのための市場

(4)帰路の積荷とする魅力的商品集荷の便宜

(5)風待ち期間中の倉庫設備

などが備わっていることを必要とした。

マラッカ海峡は、西方からもたらされる物産（綿布など）と、東インド産の香辛料と、中国の物産（絹布、陶磁器など）がそれぞれ会い交わって交換されるための条件を備えていた。古くは頓遜が「東西の交通相会し日に万余の人が集まって珍物、宝貨でないものはない」と記され、のちにマラッカが同様の理由で西洋人に賞賛されたのもこうした事情による。ポルトガルのマラッカ占領とマラッカ海峡交易の独占は、ビルマ南部の諸港と北スマトラとの結び付きをつよめ、あるいはマレー半島横断路を媒介とする貿易中継地としてのアユタヤの重要性を高めるなどの結果を生みだしたが、これもまたマラッカ海峡のもつ生態学的諸条件を基底とする適応の一形態ととらえることができよう。東

西交易路の途中に位置し発展の好条件を具備したマラッカ海峡は、マレー半島横断路、ロンボク海峡など他の通過路との競合の問題をはらみながら、その周辺の諸地域にさまざまな規模の港市国家群を生みだしていったのである。

東南アジア史におけるマラッカ――大木 昌

マラッカ海峡が東南アジアの歴史において重要性をもったのは、東西貿易の活性化と密接な関係がある。すなわち、インド、アラブ、ヨーロッパ世界と、中国を主体とする東アジア世界との交易がマラッカ海峡を経由して行われ、この交易に東南アジア世界が参画する、という構造がマラッカ海峡の浮沈を決定していたのである。このような意味で、マラッカ海峡がその重要性を一挙に高めた要因を挙げると、次のとくである。(1) 1345年のベニス＝エジプト（マムルク朝）との協定。これにより、紅海から地中海へのキャラバン・ルートの安全が確保され、ヨーロッパ（地中海）→中東→インド→東南アジア→中国に至る海上交易がマラッカを経由して活発化した。(2) 15世紀初頭に港市都市マラッカが台頭したこと。これにより、東西の船はマラッカ海峡を越えないで交易ができるようになった。(3) 15世紀初頭、スマトラ北部にコショウ栽培が始まったこと。マラッカ海峡周辺は中継地であり輸出産物の生産地にもなった。(4) 日本、新大陸から大量の銀が東南アジアに流入（1570-1630s）したこと。これにより、日本、中国市場が飛躍的に拡大した。

ポルトガルによるマラッカ占領（1511-1641年）は、スマトラ南岸→スンダ海峡→ジャワ海：アラブ→モルジブ→北スマトラ：希望峰→インド洋→スンダ海峡などの代替ルートを出現させた。こうしてマラッカ海峡の相対的重要性が低下する一方、マラッカ海峡の繁栄を生み出した要因が逆に衰退の原因となった。つまり、日本、新大陸からの供給が激減し、コショウ価格も下落した。加えて、17世紀後半からは、自由交易は衰退し、ヨーロッパ勢力によって交易がコントロールされるようになった。これ以後マラッカ海峡は、管理された通路となったのである。

マレー世界におけるマラッカ王国の意味――加藤 剛

マレー世界におけるマラッカ王国の重要性を、私は次のように考えている。①イスラムやペルシャの影響を取り入れながら、マレー王権の型（たとえば宮廷儀礼、位階）を確立した。②シャバndlalの設置、イスタナ（宮殿）、モスク、パサール（市）の建設にみられるように、ヒト、モノに対する強い吸引力を有する新しい国際港市の装置・制度を整えた。③イスラムを媒介としてインド、中東という広範囲な地域との接触形態を確立した。

これら総てに共通するのはイスラムであるが、イスラムを基礎とする新しい権力と交易の形は、おそらくサムドゥラ・パサイで輪郭が作られ、その後マラッカにおいて、100年以上の年月をかけて完成されたものであろう。

西交易路の途中に位置し発展の好条件を具備したマラッカ海峡は、マレー半島横断路、ロンボク海峡など他の通過路との競合の問題をはらみながら、その周辺の諸地域にさまざまな規模の港市国家群を生みだしていったのである。

東南アジア史におけるマラッカ――大木 昌

マラッカ海峡が東南アジアの歴史において重要性をもったのは、東西貿易の活性化と密接な関係がある。すなわち、インド、アラブ、ヨーロッパ世界と、中国を主体とする東アジア世界との交易がマラッカ海峡を経由して行われ、この交易に東南アジア世界が参画する、という構造がマラッカ海峡の浮沈を決定していたのである。このような意味で、マラッカ海峡がその重要性を一挙に高めた要因を挙げると、次のとくである。(1) 1345年のベニス＝エジプト（マムルク朝）との協定。これにより、紅海から地中海へのキャラバン・ルートの安全が確保され、ヨーロッパ（地中海）→中東→インド→東南アジア→中国に至る海上交易がマラッカを経由して活発化した。(2) 15世紀初頭に港市都市マラッカが台頭したこと。これにより、東西の船はマラッカ海峡を越えないで交易ができるようになった。(3) 15世紀初頭、スマトラ北部にコショウ栽培が始まったこと。マラッカ海峡周辺は中継地であり輸出産物の生産地にもなった。(4) 日本、新大陸から大量の銀が東南アジアに流入（1570-1630s）したこと。これにより、日本、中国市場が飛躍的に拡大した。

ポルトガルによるマラッカ占領（1511-1641年）は、スマトラ南岸→スンダ海峡→ジャワ海：アラブ→モルジブ→北スマトラ：希望峰→インド洋→スンダ海峡などの代替ルートを出現させた。こうしてマラッカ海峡の相対的重要性が低下する一方、マラッカ海峡の繁栄を生み出した要因が逆に衰退の原因となった。つまり、日本、新大陸からの供給が激減し、コショウ価格も下落した。加えて、17世紀後半からは、自由交易は衰退し、ヨーロッパ勢力によって交易がコントロールされるようになった。これ以後マラッカ海峡は、管理された通路となったのである。

マレー世界におけるマラッカ王国の意味――加藤 剛

マレー世界におけるマラッカ王国の重要性を、私は次のように考えている。①イスラムやペルシャの影響を取り入れながら、マレー王権の型（たとえば宮廷儀礼、位階）を確立した。②シャバndlalの設置、イスタナ（宮殿）、モスク、パサール（市）の建設にみられるように、ヒト、モノに対する強い吸引力を有する新しい国際港市の装置・制度を整えた。③イスラムを媒介としてインド、中東という広範囲な地域との接触形態を確立した。

これら総てに共通するのはイスラムであるが、イスラムを基礎とする新しい権力と交易の形は、おそらくサムドゥラ・パサイで輪郭が作られ、その後マラッカにおいて、100年以上の年月をかけて完成されたものであろう。

西交易路の途中に位置し発展の好条件を具備したマラッカ海峡は、マレー半島横断路、ロンボク海峡など他の通過路との競合の問題をはらみながら、その周辺の諸地域にさまざまな規模の港市国家群を生みだしていったのである。

東南アジア史におけるマラッカ――大木 昌

マラッカ海峡が東南アジアの歴史において重要性をもったのは、東西貿易の活性化と密接な関係がある。すなわち、インド、アラブ、ヨーロッパ世界と、中国を主体とする東アジア世界との交易がマラッカ海峡を経由して行われ、この交易に東南アジア世界が参画する、という構造がマラッカ海峡の浮沈を決定していたのである。このような意味で、マラッカ海峡がその重要性を一挙に高めた要因を挙げると、次のとくである。(1) 1345年のベニス＝エジプト（マムルク朝）との協定。これにより、紅海から地中海へのキャラバン・ルートの安全が確保され、ヨーロッパ（地中海）→中東→インド→東南アジア→中国に至る海上交易がマラッカを経由して活発化した。(2) 15世紀初頭に港市都市マラッカが台頭したこと。これにより、東西の船はマラッカ海峡を越えないで交易ができるようになった。(3) 15世紀初頭、スマトラ北部にコショウ栽培が始まったこと。マラッカ海峡周辺は中継地であり輸出産物の生産地にもなった。(4) 日本、新大陸から大量の銀が東南アジアに流入（1570-1630s）したこと。これにより、日本、中国市場が飛躍的に拡大した。

ポルトガルによるマラッカ占領（1511-1641年）は、スマトラ南岸→スンダ海峡→ジャワ海：アラブ→モルジブ→北スマトラ：希望峰→インド洋→スンダ海峡などの代替ルートを出現させた。こうしてマラッカ海峡の相対的重要性が低下する一方、マラッカ海峡の繁栄を生み出した要因が逆に衰退の原因となった。つまり、日本、新大陸からの供給が激減し、コショウ価格も下落した。加えて、17世紀後半からは、自由交易は衰退し、ヨーロッパ勢力によって交易がコントロールされるようになった。これ以後マラッカ海峡は、管理された通路となったのである。

マレー世界におけるマラッカ王国の意味――加藤 剛

マレー世界におけるマラッカ王国の重要性を、私は次のように考えている。①イスラムやペルシャの影響を取り入れながら、マレー王権の型（たとえば宮廷儀礼、位階）を確立した。②シャバndlの設置、イスタナ（宮殿）、モスク、パサール（市）の建設にみられるように、ヒト、モノに対する強い吸引力を有する新しい国際港市の装置・制度を整えた。③イスラムを媒介としてインド、中東という広範囲な地域との接触形態を確立した。

これら総てに共通するのはイスラムであるが、イスラムを基礎とする新しい権力と交易の形は、おそらくサムドゥラ・パサイで輪郭が作られ、その後マラッカにおいて、100年以上の年月をかけて完成されたものであろう。

マラッカ王国の「偉大さ」は、上記のような権力形態、交易組織の範型 (exemplary center ならぬ exemplary model) を確立しただけに留まらず、最終的には1511年にポルトガルによって攻略され陥落したことにある。その後「失われた範型」に昇華したところに、マラッカの偉大さがあるのではないだろうか。

異教徒によって「祖地」における再興の可能性を否定されるにいたったマラッカ王国は、やがて『マレーヤー年代記』の成立する17世紀初頭あたりから、マレー世界において理想化されていく。さらにマラッカ王朝の最後の直系スルタン・マフムッドが殺される事件（1699年）が生じたあとでは、マラッカのつくりだした範型は、地方権力にとっても比較的自由に模倣可能な存在となり、「マレー的王」（スルタンやラジャ）が各地に増殖していった。「マレー世界」の拡大、イスラムの拡大は、マラッカ王国の隆盛期ではなく、むしろ17世紀、18世紀を通じての出来事であろう。

19世紀になると、「マレー世界」（Alam Melayu）という概念はバイタリティを失う。ヨーロッパ勢力がマレー世界において霸権を振るうようになるからである。1824年の英蘭協定による「マレー世界」の分割は、この意味で象徴的な出来事であった。

「マレー世界」にかわって重要性を増してくる概念が、「マレー民族」（Bangsa Melayu）である。白人、華人、インド人などの異教徒がマラッカ海峡地域に進出してくるにつれ、「マレー」という言葉は、イスラム教徒になることを意味する「マレーに入る」（masuk Melayu）という表現に代表されるように、イスラムを中心として理解されるエスニック・カテゴリーに変質していく。

沿岸港市国家の展開

鈴木恒之

14世紀から17世紀にかけてのマラッカ海峡世界を考える上で、沿岸港市国家の発展を無視することはできない。ここでは、これら沿岸港市国家について以下の三つの点を中心概観してみたい。

先ず、港市国家の最も顕著な性質としては、これらが港市による貿易にその存在・発展を大きく依存していたことがあげられる。つまり、その国家が輸出用産物の生産地を支配下に入れている場合も、そうでない場合も同様に、農民からの貢納に依存することはなかった。その貿易品は単に奢侈品にとどまらず、その規模もいわゆる peddling trade の枠にとどまるることはなかった。そして、この時期には新しい商品として胡椒の重要性が増し、米、塩、綿織物等と共に、大量に取り引きされるようになった。この背景にはマラッカ海峡をめぐる東西貿易の総量が、この時期に飛躍的に拡大したことが考えられよう。

ついで、支配の問題である。当然にも、港市における貿易の支配が最も重要であり、各港市において法や設備が整えられた。特別な後背生産地を持たなかつたマラッカやジョホールは港市における貿易支配と周辺に於ける制海路的支配に努めたが、他の多くは後背生産地をも支配下においていた。その後背生産地の支配は、多くの場合、港市から河川システムを支配する、いわゆる樹状システムによるものであった。その支配の仕方

マラッカ王国の「偉大さ」は、上記のような権力形態、交易組織の範型 (exemplary center ならぬ exemplary model) を確立しただけに留まらず、最終的には1511年にポルトガルによって攻略され陥落したことにある。その後「失われた範型」に昇華したところに、マラッカの偉大さがあるのではないだろうか。

異教徒によって「祖地」における再興の可能性を否定されるにいたったマラッカ王国は、やがて『マレーヤー年代記』の成立する17世紀初頭あたりから、マレー世界において理想化されていく。さらにマラッカ王朝の最後の直系スルタン・マフムッドが殺される事件（1699年）が生じたあとでは、マラッカのつくりだした範型は、地方権力にとっても比較的自由に模倣可能な存在となり、「マレー的王」（スルタンやラジャ）が各地に増殖していった。「マレー世界」の拡大、イスラムの拡大は、マラッカ王国の隆盛期ではなく、むしろ17世紀、18世紀を通じての出来事であろう。

19世紀になると、「マレー世界」（Alam Melayu）という概念はバイタリティを失う。ヨーロッパ勢力がマレー世界において霸権を振るうようになるからである。1824年の英蘭協定による「マレー世界」の分割は、この意味で象徴的な出来事であった。

「マレー世界」にかわって重要性を増してくる概念が、「マレー民族」（Bangsa Melayu）である。白人、華人、インド人などの異教徒がマラッカ海峡地域に進出してくるにつれ、「マレー」という言葉は、イスラム教徒になることを意味する「マレーに入る」（masuk Melayu）という表現に代表されるように、イスラムを中心として理解されるエスニック・カテゴリーに変質していく。

沿岸港市国家の展開

鈴木恒之

14世紀から17世紀にかけてのマラッカ海峡世界を考える上で、沿岸港市国家の発展を無視することはできない。ここでは、これら沿岸港市国家について以下の三つの点を中心概観してみたい。

先ず、港市国家の最も顕著な性質としては、これらが港市による貿易にその存在・発展を大きく依存していたことがあげられる。つまり、その国家が輸出用産物の生産地を支配下に入れている場合も、そうでない場合も同様に、農民からの貢納に依存することはなかった。その貿易品は単に奢侈品にとどまらず、その規模もいわゆる peddling trade の枠にとどまるることはなかった。そして、この時期には新しい商品として胡椒の重要性が増し、米、塩、綿織物等と共に、大量に取り引きされるようになった。この背景にはマラッカ海峡をめぐる東西貿易の総量が、この時期に飛躍的に拡大したことが考えられよう。

ついで、支配の問題である。当然にも、港市における貿易の支配が最も重要であり、各港市において法や設備が整えられた。特別な後背生産地を持たなかつたマラッカやジョホールは港市における貿易支配と周辺に於ける制海路的支配に努めたが、他の多くは後背生産地をも支配下においていた。その後背生産地の支配は、多くの場合、港市から河川システムを支配する、いわゆる樹状システムによるものであった。その支配の仕方

は、後背生産地と港市とが互いに他を必要とするなどを前提とした相互依存関係にたつ緩やかなものと、上から強制的に締め付ける一元的支配とに大別されよう。

国家の中心である港市は、貿易港であると同時に、王都であり、国内唯一の都市であった。この都市は商業に依存し、多くの人口を擁していたが、その商業は外国商人とごく少数の王侯貴族に独占されがちであった。手工業の水準は決して低くはなかったが、職人は王侯貴族に隸属する場合が通常で、その自由な発展は阻害されていた。これらの点で、この時期の港市には「近代」都市への発展の契機は極端に乏しかったといえよう。

海外学術情報

石井米雄

IAHA の日程決まる

IAHA (International Association of Historians of Asia) の第12回大会の日程は明1991年6月24-28日、香港大学 (Wang Gungwu 学長) で開催されることが最終的に決定した。今回の共通テーマは「伝統と発展 (Tradition and Development)」で、次の8つの分科会が開かれる予定である。

Origins of Asian Civilizations

Historical Roots of Economic Development in Asia

The West in Asia: Problems and Consequences

Conflict and Harmony in Asian Societies

Asia on the Threshold of the 21st Century

Overseas Asian Communities

Hong Kong and Macau Studies

Asian Historiography: Sources and Interpretations

日本からの積極的な参加が期待されている。出席希望者は下記の住所に連絡して頂きたい。

Dr. Michael Y. L. Luk

The Secretary-General, 12th IAHA Conference

Department of History, University of Hong Kong

Pakfulam road, Hong Kong

Fax: 852-5-858-2549 (History)

200語以内のアブストラクトの提出期限は1990年9月30日、不可能な場合にはその旨事務局に事前に報告すれば1990年12月31日まで待てるとの由。

は、後背生産地と港市とが互いに他を必要とするなどを前提とした相互依存関係にたつ緩やかなものと、上から強制的に締め付ける一元的支配とに大別されよう。

国家の中心である港市は、貿易港であると同時に、王都であり、国内唯一の都市であった。この都市は商業に依存し、多くの人口を擁していたが、その商業は外国商人とごく少数の王侯貴族に独占されがちであった。手工業の水準は決して低くはなかったが、職人は王侯貴族に隸属する場合が通常で、その自由な発展は阻害されていた。これらの点で、この時期の港市には「近代」都市への発展の契機は極端に乏しかったといえよう。

海外学術情報

石井米雄

IAHA の日程決まる

IAHA (International Association of Historians of Asia) の第12回大会の日程は明1991年6月24-28日、香港大学 (Wang Gungwu 学長) で開催されることが最終的に決定した。今回の共通テーマは「伝統と発展 (Tradition and Development)」で、次の8つの分科会が開かれる予定である。

Origins of Asian Civilizations

Historical Roots of Economic Development in Asia

The West in Asia: Problems and Consequences

Conflict and Harmony in Asian Societies

Asia on the Threshold of the 21st Century

Overseas Asian Communities

Hong Kong and Macau Studies

Asian Historiography: Sources and Interpretations

日本からの積極的な参加が期待されている。出席希望者は下記の住所に連絡して頂きたい。

Dr. Michael Y. L. Luk

The Secretary-General, 12th IAHA Conference

Department of History, University of Hong Kong

Pakfulam road, Hong Kong

Fax: 852-5-858-2549 (History)

200語以内のアブストラクトの提出期限は1990年9月30日、不可能な場合にはその旨事務局に事前に報告すれば1990年12月31日まで待てるとの由。

アメリカ・カナダ西部の東南アジア研究体制の新たな動き

1988年シアトルのワシントン大学にあらたに「東南アジア研究センター」(Southeast Asian Studies, DR-05, 229 Thomson Hall, University of Washington, Seattle, WA98195, USA)が設立され、タイ・ラオス人類学研究で著名な Dr. Charles F. Keyes が所長に就任した。これを機会にオレゴン大学 (Southeast Asian Studies, c/o History, 175 Prince Lucien Campbell Hall, University of Oregon, Eugene, OR 97403-1228, USA), カナダのバンクーバーにある UBC (Institute of Asian Research, University of British Columbia, 1871 West Mall Vancouver, BC, Canada V6T 1W5) などアメリカ大陸北西部の東南アジア研究機関を結ぶコンソーシアム (The Northwest Regional Consortium for Southeast Asian Studies) が結成された。その活動はニュースレター SEASSPAN (Southeast Asian Studies in the Pacific Northwest) に紹介されている。連絡先は Dr. Nancy Donnelly, Assistant Director, Consortium, University of Washington, 229 Thomson, DR-05, Seattle, WA 98195, USA)。

ANU の東南アジア研究関係ニュースレター

オーストラリア国立大学における東南アジア研究の最近の動きは、つぎのふたつのニュースレターに詳しい。

(1) ECHOSEA Newsletter

これは ANU の Research School of Pacific Studies の Professor Anthony Reid が中心となって企画された Economic History Southeast Asia というプロジェクトの動静を伝えることを目的としたニュースレターで、関係の新刊紹介などもあり充実した内容である。連絡先は Research School of Pacific Studies, ANU, P. O. Box 4, Canberra 2601, Australia (Fax: 062-57-1893)。

(2) Thai-Yunnan, Project Newsletter

人類学部の Dr. Gehan Wijeyewardene が編集するニュースレターで毎号30ページ近くもあり、東南アジア大陸部の北部から中国の雲南省を中心として広く分布する諸民族関係の詳細な研究情報が提供されている。論文として発表される前の研究ノートや討論もあり研究者にとってきわめて有益である。連絡先は Department of Anthropology, Research School of Pacific Studies, ANU, P. O. Box 4, Canberra ACT 2601, Australia。

資料・研究短報

「南方関与」開教関係資料について 楠木瑞生

宗教の教えを伝えることを布教と言うのが普通であるが、仏教のほうで時には開教という言葉を使うことがある。仏教でいう布教と開教には、布教は日本人にたいして、特に日本の国内に住む人に教えを伝える場合に使い、開教は海外に住む日本人や外国人に

布教するときに使うという区別がある。もっとも東本願寺の歴史では「鹿児島開教」とか「北海道開教」という言い方をするが、これは鹿児島や北海道が真宗の布教史上特殊な意味を持っていたからである。

日本の宗教団体の開教活動が活発になったのは、江戸時代の鎖国政策が廃止されてからである。個人的な開教活動はかなり早くからあったようであるが、宗教団体として先鞭をつけたのは1873年（明治6年）に小栗栖香頂を中国に送り出した東本願寺であろう。このとき既に東本願寺がはっきりした開教の方針や政策を持っていたかどうかは疑問があるが、しかし、これ以後中国大陸、台湾、韓半島・朝鮮半島、東南アジア、ハワイ、北米大陸とその布教線は広がって行くのである。

これに次いで開教活動を始めたのは同じ真宗系の西本願寺である。この西本願寺の開教活動は1900年前後から活発に行われるようになるが、地域によっては先発の東本願寺をしのぐ活動を見せたり西本願寺の独壇場になるところもあった。

東西本願寺ほど大規模な開教活動はしなかったものの、これに次いで開教に積極的な姿勢を見せたのは曹洞宗と浄土宗である。例えば曹洞宗はシンガポールで、西本願寺が1899年に、東本願寺が1901年に開教したといわれるのに、既に1895年頃に開教活動をしていたという記録がある。

こうした宗教各派の開教活動は、さまざまな障害にぶつかりながらも、しだいにアジア全体に広げられてゆく。東亜研究所の調査によれば、1939年当時に中国大陸本土にあった日本の宗教団体の活動拠点は、神道各派が5派62ヶ所、仏教各派が12派158ヶ所、キリスト教各派が10派48ヶ所であったという。この上に、東南アジアや「満州」にも多数あったはずであるから、アジアだけを考えてもその数がどれくらいになるのか見当もつかないほどである。

こうした宗教団体の活動は、単に開教だけにとどまらず、日本語学校や幼稚園の経営から施薬所、職業指導所、産院などの活動まで実に多様であった。これまで日本の「南方関与」、「アジア関与」については政治的軍事側面が強調されがちであったが、こうした宗教団体の活動を見ると、日本の「南方関与」、「アジア関与」の巨大な側面をなしていることがわかるだろう。

ところが、こうした宗教団体の活動についての研究は、未だ細々と行われているに過ぎない。なかなか研究が進まないことについてはいろいろ理由があるにしても、まずは資料の所在が問題であろう。そこで、最近私の周辺で見つかったいくつかの開教関係資料を紹介しよう。

私の在籍している同朋大学の佛教文化研究所ではこれまで各地の寺院の所蔵文書の調査を行い、資料をマイクロ化して集積に努めてきた。その大部分は江戸時代以前のものであるが、しかしそうした中にいくつか貴重な開教関係資料が含まれている。そのひとつが水谷魁曜の「清国行日誌」全5巻及び「清国行日誌付録」、「在閩雑誌」である。

水谷はもともと愛知県の真宗大谷派（東本願寺）崇覚寺の布教使試補の資格を持つ僧侶であった。偶然のことから清国開教を思い立って本山と種々交渉の末、ようやく1900年4月に「泉州留学ヲ命ズ」との辞令をもらい渡清することになった。ところが中国泉

州に着くと間もなく「廈門教堂放火事件」に合うことになる。「事件」後に父親が危篤との連絡を受けて1901年8月に帰国するが、この「日誌」は渡清から帰国までの一日も欠かさずつけられた記録である。

ここには「事件」の直前に廈門、泉州の開教の中心人物であった高松誓が台湾としきりに連絡を取っていた様子や、「事件」発生後の日本領事や海軍の動き、何事かを画策している台湾の活動などを活き活きと記している。また事件についても、日本が主張するように中国人の無頼漢が放火したのではなく日本が自分たちの手でわざとやったものだ、といううわさが中国人の間に広まっていることを「憤激」をもって記している。

「付録」には餞別の金額や購入品についての詳細な心覚えが記されているとともに、金陵東文学堂章程、杭州日文学堂章程、姑蘿東文学堂章程など今日では見られない資料も書き写されている。

「雑誌」は廈門、泉州地方について、人口、商業、交通、宗教その他にわたる詳細な調査報告である。

このように「日誌」は「廈門事件」のさ中にいた日本人の記録であり、「アジア関与」の庶民のレベルにおける具体的な姿を直接伺うことのできる資料と言えよう。

水谷に限らず、開教使の残した記録は今日少しづつではあるが発掘されてきている。東本願寺名古屋別院には、1927年に中国に渡り日中戦争の時に大陸で開教使をしていた藤井静宣（草宣、宣成）が記したメモや手紙などが未整理のまま残されている。藤井は豊橋の浄円寺に入寺し、後に北京別院輪番、中支開教監督、上海別院輪番その他を歴任し、北京では覚生女子中学校の創設にも携わった。まさに中国に対する日本の宗教団体の活動の最前線にいた人であった。この藤井の資料を読むことによって日中戦争下の日本の「文化工作」の姿を知ることができる。

まだこの地に個人が持っている記録類で重要と思われるものがいくつかあるが、ここでは省略して、昨年大谷大学に移管された東本願寺の開教関係資料について述べておこう。未だ整理ができていないために未公開であるがその量は相当に大部なものである。この資料は明治から太平洋戦争下までのものであるが、量からいうと明治期のものは散逸していて少なく、中心となっているものは太平洋戦争期のものである。地域は中国や朝鮮のみならず東南アジアや南洋、北米にまで及んでいて東本願寺の活動の広さを伺わせるものである。内容は、興亞院や文部省からの指示や大政翼賛会からの連絡、本山の指令や各地からの報告、開教使の履歴書などにいたるまで雑多なものが含まれている。内容を読み解くのはこれから仕事であるが、まずは整理することさえ大変な難事業になるだろう。しかし、「アジア関与」の「文化的側面」ないしは「民衆的側面」の問題を考えるときに欠くことのできない資料であることは間違いないだろう。

以上いくつか資料を紹介したが、これだけを見ても開教を単に宗教上の問題として扱うだけでなく、日本とアジアの間に起きた文化摩擦の巨大な一側面として見ることが必要だということがわかるだろう。

ホイアン・シンポジウムと ベトナム史研究の“トイモイ” ————— 桃木 至朗

80年代中頃から始まったベトナム社会の“トイモイ”（刷新）の中で、歴史学を含む社会科学各分野も大きな変化をとげてきた。本年3月に中部ベトナムのダナン市で行なわれた「古都市ホイアンに関する国際シンポジウム」も、様々な点でその変化を象徴するものだった。

シンポが計画・組織された過程、日本側各界の協力体制などについては、当時の各新聞、テレビでも報道されたが、ベトナムで最初の人文・社会科学分野での純学術的国際シンポジウムとして、ベトナム側では国家レベルの事業として取り組まれたものであった。

シンポには、日本ベトナム研究者会議（87年設立）を中心となって組織された石沢良昭団長代行以下14名の日本代表团（山本達郎団長は健康上の理由で不参加）のほか、オランダ、カナダ、タイなど、総勢20名ほどの外国からの研究者と、そして50名以上のベトナムの第一線研究者が参加した。筆者も事務局の一員として日本代表团に加わった。3月22、23の両日にシンポ本体が行なわれたほか、21日にホイアン市を見学、また日本代表团としてはシンポ前にハノイで、シンポ後にはフエ、ニャチャン、ホーチミン市などで遺跡、博物館、文書館等の見学や研究機関等との交流を行なった。

シンポのプログラムは以下のようなもので、単なる日本町の研究にとどまらない多様なテーマの報告が行なわれた。

〔3月22日午前：全体会〕開幕の辞／ファン・フィ・レ「ホイアン—歴史と現況」／石沢良昭「ホイアンと日本人」／ノン・クオック・チャン「古都市ホイアンの価値と保護・修復、街の役割發揮の方向」／千原大五郎「茶屋新六の交趾国貿易渡海図に描かれた諸建築」／チャン・クオック・ウォン「ホイアンの歴史地理的位置と文化地理的本領」／チュオン・ヴァン・ビン、J. Kleinen（蘭）「17—18世紀のオランダと阮氏との関係に関する VOC 資料」

〔3月22日午後～23日午前：分科会〕

第1分科会（考古・文化。座長：長谷部樂爾、チャン・クオック・ウォン、ハー・ヴァン・タン）長谷部樂爾「陶磁貿易を通じて見た日越関係」／バー・ヴァン・ファイ、ダン・ヴァン・バオ「ホイアンと隣接地域の地勢の特徴」／P. Burns, R. M. Brown（タイ）「11世紀のチャムーフィリピン関係」／ホアン・ヴァン・ホアン、ラム・ミー・ズン「ホイアンの古銭とその歴史的発展の各段階」／青柳洋治「14—15世紀東南アジア島嶼部発掘のベトナム陶磁」／チャン・キー・フォン、バー・ヒウ・ミン「4—10世紀、チャンパ王国期のダイチエム河口」／ホー・スアン・ティン「ホイアンとクアンナムダナンの原史におけるカムハー甕棺遺跡の位置」／グエン・ボイ・リエン他「ホイアン—クアンナム地方のゲーバウ船」／グエン・ドゥック・ミン、チャン・ヴァン・ニヤン「ホイアンの水祭り」／ドアン・ティエン・トゥアット「ホイアン方言」／ホアン・ティ・チャウ「18世紀ホイアン—ダナンの混血言語」

第2分科会 (歴史。座長:川本邦衛, L. Blusse, ファン・フィ・レー) 川本邦衛「外蕃通書から見た広南阮氏の世界認識」／グエン・ディン・ダウ「商港ホイアンの形成と発展」／小倉貞男「交趾国貿易渡海図と滻見觀音」／バー・ミン・ザン「ホイアンの日本人、日本町、日本の遺物」／加藤栄一「日本のオランダ商館のインドシナ貿易」／ドー・バン「ホイアンの国内交易の関係と様式」／生田滋「2-17世紀東南アジア海域における各港市の役割」／レー・ヴァン・ラン「ベトナム中世都市群の中のホイアン」／L. Blusse (蘭)「クアンナムと北部における VOC」／ファン・ダイ・ゾアン「ホイアンと中部」／グエン・ヴァン・ホアン「ホイアン、17世紀ベトナムの世界との文化交流の中心」／ズオン・チュン・クオック「古都市ホイアンとの関係の中でのダナン」／グエン・チー・チュン、チャン・アイン「タインチャウの燕巣採り」

第3分科会 (建築と遺跡保存。座長:千原大五郎, ホアン・ダオ・キン, リウ・チャン・ティエウ) Kazimiel Kwiatkowski (ポーランド)「ホイアン旧市街の修復—保存プログラムに対するポーランドの経験」／チュー・クアン・チュー「美術から見たホイアン」／チン・カオ・トゥオン「建築の角度から見たホイアンの文化接触」／チュオン・タウ「来遠橋」／ダン・ヴァン・バイ, グエン・クオック・フン「古都市ホイアンの保存と利用に関する大きな方向」／ホアン・ダオ・キン, ヴー・ヒウ・ミン「ホイアン古建築の現況の分析と評価」／ホアン・ダオ・キン他「ホイアン旧市街の保存と利用に関する若干の提案」

〔3月23日午後:全体会〕 各分科会からの報告／総合討論／討論まとめ／閉会の辞

このシンポの学術的意義としては(1)日本を含めた資本主義諸国と、しかも多数のベトナムを専門としない研究者との交流の実現、(2)ほとんど空白の分野であった中南部の前近代史を対象としたこと、(3)未開拓であった生態的条件、対外関係、遺跡保存などが主要テーマとして取り上げられたこと、の3点があげられる。主に社会主义国と交流し、生産関係と階級闘争、民族性と民族闘争などを主要課題としていたドイモイ以前の研究から欠落していた部分を埋める大きな意義を、それらが持っていることは言うまでもない。

実際に出て来た研究成果の最大のものは、日本町形成とベト人の進出以前、つまりプレ・サーフィンないしサーフィン前期と呼ばれる青銅器文化—サーフィン（後期）の鉄器文化—チャンパ文化の各段階におけるホイアン地域の地理、生態、考古学に関する研究成果である。小倉貞男氏の『朱印船時代の日本人』（中公新書、1988年）でも紹介されているそれらの問題に関するベトナム側研究者の報告は、外国人研究者たちを大いに興奮させた。中部ベトナムの基層文化と国家形成、南シナ海海域世界史などを考える上で興味究い材料が次々と提供された。

その他、大航海時代についても VOC 文書や現地の文献史料、出土陶磁器など重要な新資料が紹介されたこと、学術研究と並ぶ重要な問題である遺跡保存についても、街並み保存の観点からの課題が明確にされたこと、等々、シンポの成果は多方面にわたった。

以上のように、ホイアンの中部ベトナムの歴史が時間的にも空間的にも大きな広がり

を伴って総合的に検討されたことは高く評価すべきだが、あえて残された課題を探すと(1)日本・西欧との交流が組織上でも内容的にも重視されたのに対し、中国・東南アジア諸国との関係について言及が少なかったこと、(2)日本町と広南阮氏に関する研究は、新資料はあっても全体に興奮が薄かったこと、(3)対外関係が色々言及されても、それを通じて各時代の国際関係の構造、そこでベトナムが占めた位置などは明からにされなかつたこと、などがあげられる。

ともあれ、中南部ベトナム史やベトナムを地域世界の中に位置づけることは、今後大いに進展の期待されるテーマであり、その第一歩としての本シンポが多方面の努力によって成功したことをよろこびたい。

地区例会・研究会活動状況

関東地区

鈴木恒之

関東例会では、東京女子大学文理学部に会場を借り、本年4月以降の月例会を下記の通りに開催しました。毎回、発表者が力作を披露し、若い研究者の方々も熱心に参加して下さっているが、以前に比べ参加者がいささか減り気味なのが残念に思われます。より多くの皆様の参加を期待しております。

1990年4月28日 西尾 寛治「ダウラト VS プルジャンジアン：マレー世界の伝統的政治体系に関する一考察」

5月26日 高橋 ゆり「セイン・ティン（ティッパン・マウン・ワ）の思想と文学——1930年代のビルマと個人——」

7月14日 南家三津子「インドネシア新体制下における住民組織の強化政策」

9月29日 玉置 泰明「土地・開発・組織下——フィリピンにおける『歴史を作る主体』としての農民・少数民族——」

中部地区

櫻木瑞生

二ヶ月に一度の割合で東南アジア研究を開いています。最近三回の研究会は次のようなテーマで開催されました。

第57回例会 5月12日 1920～30年代のインドネシアの国際収支——植民地的流出とその政治的背景
報告者 名古屋市立大学 内藤能房氏

第58回例会 7月21日 現代ジャワ農村における社会組織と累積構造
報告者 愛知学院大学 黒柳晴夫氏

第59回例会 9月22日 19世紀末の宗務官吏
報告者 名古屋短期大学 小林寧子氏

この半年はどういうものか話題がインドネシアに集中してしまいました。そのためか、

を伴って総合的に検討されたことは高く評価すべきだが、あえて残された課題を探すと(1)日本・西欧との交流が組織上でも内容的にも重視されたのに対し、中国・東南アジア諸国との関係について言及が少なかったこと、(2)日本町と広南阮氏に関する研究は、新資料はあっても全体に興奮が薄かったこと、(3)対外関係が色々言及されても、それを通じて各時代の国際関係の構造、そこでベトナムが占めた位置などは明からにされなかつたこと、などがあげられる。

ともあれ、中南部ベトナム史やベトナムを地域世界の中に位置づけることは、今後大いに進展の期待されるテーマであり、その第一歩としての本シンポが多方面の努力によって成功したことをよろこびたい。

地区例会・研究会活動状況

関東地区

鈴木恒之

関東例会では、東京女子大学文理学部に会場を借り、本年4月以降の月例会を下記の通りに開催しました。毎回、発表者が力作を披露し、若い研究者の方々も熱心に参加して下さっているが、以前に比べ参加者がいささか減り気味なのが残念に思われます。より多くの皆様の参加を期待しております。

1990年4月28日 西尾 寛治「ダウラト VS プルジャンジアン：マレー世界の伝統的政治体系に関する一考察」

5月26日 高橋 ゆり「セイン・ティン（ティッパン・マウン・ワ）の思想と文学——1930年代のビルマと個人——」

7月14日 南家三津子「インドネシア新体制下における住民組織の強化政策」

9月29日 玉置 泰明「土地・開発・組織下——フィリピンにおける『歴史を作る主体』としての農民・少数民族——」

中部地区

櫻木瑞生

二ヶ月に一度の割合で東南アジア研究を開いています。最近三回の研究会は次のようなテーマで開催されました。

第57回例会 5月12日 1920～30年代のインドネシアの国際収支——植民地的流出とその政治的背景
報告者 名古屋市立大学 内藤能房氏

第58回例会 7月21日 現代ジャワ農村における社会組織と累積構造
報告者 愛知学院大学 黒柳晴夫氏

第59回例会 9月22日 19世紀末の宗務官吏
報告者 名古屋短期大学 小林寧子氏

この半年はどういうものか話題がインドネシアに集中してしまいました。そのためか、

参加者も20名を越えるときもありましたが10名を割るなど大きく変動しました。これからはできるだけ多様なテーマをお願いして、幅広い参加者が集まれるようにしたいと思っています。

関西地区

倉沢愛子

1990年5月から10月までに次のように5回の例会を開催し、5名の方々から話題を提供していただいた。

5月14日 富永泰代「19世紀末～20世紀初頭インドネシアの知識人カルティニについての一考察——カルティニにおける知識、世界認識の形成過程」

6月9日 加藤 剛「植民地主義と物質主義、または、ある社会学者の述懐」

7月21日 黒田景子「ナコンシータマラートの南進政策、18世紀後半から19世紀前半のマレー半島の情勢について」

9月8日 原 誠「日本軍政下のインドネシアのキリスト教」

10月13日 広末雅士「北スマトラにおける港市国家と後背地」

会場は引き続き摂南大学で常時20～30名の出席者を得ている。3月まで開催していた「漢籍を読む会」は、今のところ中断中である。例会以外の各種研究会を開催することも検討中であるが目下のところ実現していない。

事務局からのお願い

『会報』の内容充実のため、資料・研究短報欄へご寄稿下さい。

新資料に関する情報、探究資料の公開捜査、内外での研究集会に関する情報や紹介（但し、本学会の組織とは直接関係なく、かつ恒常に運営されている研究会の年次報告に類するものはご遠慮下さい）、特定分野にかかる内外の新しい研究動向など、二千字程度を目処にお纏め頂き、事務局宛ご送付下さい。毎年3月末と9月末に締め切り、それぞれ5月及び11月発行の『会報』に掲載させて頂きます。

住所変更等につきましては、すみやかに事務局宛ご一報下さい。

「転居先不明」は会誌『東南アジア歴史と文化』『会報』その他各種ご案内の送付に支障をきたすことになります。ご面倒ながら、転居、転勤などの通知先に、本学会事務局も加えて頂きますようお願い申し上げます。なお、今回の変更は、10月6日までに事務局へ連絡のあった分です。

退会の際には退会届けを

諸般の事情で東南アジア史学会を退会される場合には、退会届を事務局宛にお送り下さいますようお願い申し上げます。主として、『会誌』の誤配を防ぐためです。

東南アジア史学会の運営全般に関するご意見、ご要望がございましたら、事務局までご遠慮なくお寄せ下さい。

会報第52号訂正

19頁11行目 0429-58-3806→0429-56-3806

同 21行目 守治市→宇治市

東南アジア史学会会報

1990年11月 発行

発 行 者 東南アジア史学会(会長 明石陽至)
住 所 〒441 愛知県豊橋市町畠町1-1
愛知大学文学部伊東研究室内
電 話 0532-47-4111 FAX 0532-47-4132
郵便振替 名古屋4-106244 東南アジア史学会
